

木材乾燥：株式会社シンラテック（長門市）

天然乾燥と人工乾燥を組み合わせた独自の技術を確立し、シイの木フローリングの製品化に成功



▲前列右が近藤友宏社長（写真提供：㈱シンラテック）

◆企業概要

所在地：長門市日置中10758-131

設立：1959年

代表者：近藤 友宏氏（こんどう ともひろ）

資本金：3,000万円

従業員：20名

URL：<http://www.sinlatech.com>

事業内容：製材、木材加工、木材チップ製造、
木工事、林業

●はじめに

山口県の西北部にあり、日本海に面した長門市は海のイメージが強いが、一方で豊富な森林資源にも恵まれている。スギやヒノキ、シイの木などが群生し、森林率（土地の面積に対する森林の専有面積の割合）は75%で全国平均の67%を上回る。

そんな地元産木材を有効活用しようと、伐採から製材、乾燥、加工まで一貫して手掛けているのが同市の㈱シンラテックだ。今回の「県内工場の職人技」では、硬くて加工が難しく、建築材料としておよそ使い勝手の悪いシイの木を、高級床材として製品化に成功した同社の独自の技術力に着目してみた。

●シイの木を建築材料に活用したい

建築材料として不向きなシイの木は、製紙原料となるチップや木炭の材料として利用されることが多い。その実、シンラテックも創業以来、近隣で伐採されたシイの木を使って製紙会社向けにチップを製造してきた。

シイの木は寺や神社、公園などで見かける身近な樹木だが、同社の近藤友宏社長によると、建築材料として使えるような真っ直ぐで太いシイの木は、土壌と気候の関係から山口県にしか生えていないという。まさに森の恵み、地域の持つその優位性をもっと生かし切る方法はないだろうか。同社の挑戦が始まった。

●フローリングとして製品化

堅木^{かたぎ}として知られるシイの木は、スギの3倍、ヒノキの2.2倍の硬度をもつ。それゆえ傷がつきにくく表面硬化の処理をする必要がないので、自然のままで利用できる。色が白く木肌が高級木材のホワイトオーク（ナラの仲間）に似ているという利点もある。

こうした特長を生かし、フローリング材として加工する構想が持ち上がった。ところが、軟らかいスギやヒノキと違い、もともと加工に不向きという決定的な短所を抱えている。構想を実現させるためには多くの課題を克服しなければならなかった。しかし、構想から2年がかり

の挑戦がようやく実る。製品化に成功したシイの木フローリングは、白い木肌が和風、洋風どちらの住宅にも合うと、徐々に県内外の工務店から注目されるようになった。

●天然乾燥と人工乾燥

シイの木をフローリングに加工する工程で、最も苦労したのが乾燥である。木材は大量の水分を含んでおり、その水分を抜くことで強度が上がり加工もしやすくなる。ところが、シイの木はスギやヒノキに比べると乾燥させるのが非常に難しい厄介者。乾燥が進むにつれて変形や収縮の度合いが他の木材よりも大きくなり、割れや反り、曲がりも頻繁に発生する。同社は2年におよぶ試行錯誤の末に、天然乾燥と人工乾燥を組み合わせた独自の乾燥法を確立させたのだった。

まずは、工場に運び込まれたシイの木の中で長くて太い原木を乾燥用の板に加工し、3か月間じっくり天然乾燥する。その後、乾燥庫の中で2～3週間人工乾燥を行う。このとき乾燥庫内の温度を高くすれば、木材を早く乾かすことができる。しかし、シイの木は非常にデリケート。温度を高くするとすぐに割れてしまうため、約50度の低温域で湿度や風の調整を行いながら仕上げていくのがポイントだ。職人の技と勘の見せどころである。

●IT化などによる技術の伝承を目指す

職人の知識や経験に裏づけられた確かな技術力がシイの木の製品化を可能にした。その技術を保有しているのは近藤社長の実父で、先代社長の近藤健氏である。長年にわたり木材チップの製造に取り組むかたわら製材・加工も手掛け



▲シイの木の原木



▲天然乾燥



▲乾燥庫で人工乾燥



▲加工されたシイの木

てきた。現在は技術顧問の肩書を持ち、第一線でフローリング材の加工をはじめとする「技」の指導・伝承に努めている。

一方、サラリーマン時代にITコンサルタントを経験した近藤社長は、「職人技」のデータ化やマニュアル化、IT化などによる技術の伝承を目指したい考え。それにより若手職人の育成を進め、他社に真似のできないオンリーワンの技術に磨きをかけていくつもりだ。

そのためにも人材の確保は欠かせない。今年4月には2名の新社員を迎えることができたが、生徒数が年々減少する中で、「日陰の産業」(近藤社長)が若者を採用するのは難しい状況にある。そこで、まずは木材加工の楽しさや魅力を知ってもらおうと、長門市と連携して中高生対象のイベントを自社の木材伐採現場で開催するなど、木材産業をアピールする取り組みから始めている。

●努力する人間を社会は放っておかない

2011年ごろから本格的に製造をスタートしたシイの木フローリングは、品質を高く評価され、13年には県の優れた農林水産物に与えられる「やまぐちブランド」に認定された。販売開始当初、約70坪(住宅約2棟分)だった年間出荷量は、小学校など公共施設でも使われるようになった結果、現在は1,000坪超に急増。最近では、今年4月にオープンした道の駅「センザキッチン」(長門市仙崎)内に整備された木育推進拠点施設「長門おもちゃ美術館」や、長門市産材を活用した長門市役所新庁舎の建設工事にも同社が加工したシイの木が採用されるまでになった。

近藤社長が父親の求めに従い、迷った末に脱サラして家業を継いだのは09年。当時の経営内容はかなり苦しい状況にあり、廃業さえも視野

に入れた。何度悔しさを噛みしめたことか。しかし、そんな思いをバネにして努力に努力を重ねた結果、会社は立ち直った。「努力する人間を社会は放っておかない」。近藤社長の座右の銘である。努力して良いものを作れば、必ず社会から必要とされるはずという考えだ。

今後はシイの木以外の木材も製品化して、商品のバリエーションを増やしたい。技術向上のために愚直な努力を続け、国産材、地域の木材を使った優れた製品を送り出すことによって、「山口県の木材屋にこんな会社がある」と認められたい。これが近藤社長の究極の願いである。

●おわりに

社名の「シンラテック」とは、「森羅万象」と「技術の力(テクノロジー)」を掛け合わせた言葉。人々が生きていくうえでなくてはならない大切な森林を守るために、技術力を磨き、優れた製品を作る。社名に籠めたその思いを具現化した初めての製品がシイの木フローリングだった。そう捉えて間違いなさそうだ。

(松本 敏明)



▲シイの木フローリングの施工例
(写真提供：(株)シンラテック)